異世界で
透明人間
木田かたつむり
Kita Katatsumuri
俺が最高の騎士に
なって君を守る！

主な登場人物
CHARACTER
ジャック・スノウ
人気ファンタジーギャルゲーム『ガールズ&ハンター』の嫌われキャラに転生した主人公。透明化スキルを駆使して、最高の騎士になるべく奮闘する。
ザック・ウェバー
ルッツの兄で、彼の専属騎士を務める。無口……。
ラルフ・ガードナー
ジャックの専属騎士。運が悪く「なんで俺ばっかり!?」が口癖。猫好き。
クレイ
『ガールズ&ハンター』における主人公。主人公補正のため、何かと優遇されている。
セシリア
ガリア王国の第一王女。とある事件をきっかけにジャックの恋人になる。
ルッツ・ウェバー
ジャックにとって学園での唯一の友人。美形だが、ファッションセンスがない。
フィリス
ヴィクトリア帝国の皇女。「金髪ドリル」の二つ名を持つ。決闘好き。

第1話　史上最悪の嫌われ者に転生!?

とあることにショックを受けて倒れた俺は、突然、前世の記憶を取り戻した。しばらく何が起きたのか理解できずに困惑していたが、ようやく冷静さを取り戻してベッドから起き上がる。

そして鏡の前に立ち、自分の顔を覗き込む。

「顔が悪くないのは、せめてもの救いだよな」

この男が誰か、俺は知っている。

人気ファンタジーギャルゲーム『ガールズ＆ハンター』（通称、ガルハン）の悪役キャラ、ジャック・スノウだ。

このゲームの大まかな内容は、平民の主人公が騎士学校に入り、苦労しながらモンスターを狩り、ヒロインの悩みを解決し、様々なイベントをクリアして、ハーレムを作るといったもの。

その主人公を妨害したりヒロインに絡んだりする最低な男が俺だ。

学園の嫌われ者。取り巻きと共に主人公にやられる噛ませ犬。権力を振りかざす暴君で、たいして強くもないのに努力をしない雑魚キャラ。人から嫌われるヘイト要素を挙げればきりがない。

なお最後は、処刑されてジ・エンドの悲惨な末路を迎えることになる。
そんな嫌われ者に俺は転生していたらしい。ちょっとややこしいのは、転生したものの、ずっと記憶を失っていたこと。それがついさっき戻った。
確かにジャック・スノウは、ゲームでは雑魚で嫌われ者だったが、アニメ化されると、印象が変わった。実は俺は、アニメを見てこのキャラが好きになったのだ。
その理由は——。

1．そもそも主人公の方がクズ
2．ヒロインの性格が最悪
3．ジャックはむしろヒロインの被害者
4．正面から戦い、堂々と負けるという、ジャックの潔(いさぎよ)さ
5．商人に騙(だま)され続ける不幸な境遇

アニメ化で印象が変化することはあるが、こんなに違ったのはガルハンくらいだろう。
そして、転生してみてさらにわかったのは、ジャックは本当は努力家だということ。ゲームをプレイしていたときの印象とは大違いだ。
さっそく、この世界におけるジャックのステータスを確認しておこう。

この剣と魔法の世界において、「ジョブ」は重要だ。なお、ジャックのジョブは「モノマネ師」である。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【名前】　**ジャック・スノウ**
【ジョブ】　**モノマネ師（ランク１）**
【スキル】　**モノマネ、無詠唱(むえいしょう)、アイテムボックス、上級鑑定**
【精霊(せいれい)の加護(かご)】　**なし**

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「モノマネ」は、相手が自分のランク以下であれば、その「スキル」「精霊の加護」「武器防具の特殊効果」まで使えるという能力だ。
「無詠唱」は、詠唱をしなくてもスキルや魔法を発動できるというもの。「アイテムボックス」は、ランク１であれば、アイテムを百種類、それぞれ百個収納できる便利スキル。「上級鑑定」は、この世界に存在するすべてのアイテムを鑑定できる。
モノマネ師はこんな風に便利なスキルが多いので、戦闘能力は微妙だが優秀なジョブだ。
しかし取得するのは簡単ではない。

ジョブランク7以上の人の動きを正確にトレースしなければいけないのだ。ちなみに、ジョブランクは1から10まであり、この世界の住人の平均は4。つまり7はかなり高く、トレースは簡単ではない。

それにもかかわらず、努力家なジャックは、ランク7のブラックナイトの父親の剣さばきをマネし続け、モノマネ師を取得してしまった。

だがそれは、彼にとって本意ではなかった。本当は、父のようなナイト職に就きたかったのである。ガルハンには「十二歳になったとき、取得可能なジョブの中からレア度の一番高いジョブに自動的になってしまう」という設定があり、モノマネ師に勝手になってしまったのだ。

とはいえ、自動取得を防ぐ方法はあり、抜け目ない兄と弟はそれをやっていたのでまだジョブは取得していない。前世の記憶が戻る前の俺はそんなことさえ知らなかった。なお、俺がモノマネ師を取得したということは、家内の誰にも知られていない。

鏡を見ていたら部屋の扉がノックされた。続いて男の声が聞こえてくる。

「ジャック様、お目覚めになりましたか？」

この声は、執事長の息子ロイド。ジャック専属の執事である。

こいつが問題だ。いや、そもそもジャックの周囲には問題のある人物が多いのだが。

ジャックこと俺には、双子の弟アンリと腹違いの兄アレンがいる。俺の実母エリーザはなぜか俺

を憎み、弟を溺愛（できあい）。そしてこのロイドを買収して、俺をいろいろと妨害していた。

ちなみに俺が、兄からも弟からも母からも執事からも裏切られたと知って、ショックで倒れたのがついさっきのこと。おかげで前世の記憶が戻ったというわけだ。まあ、信頼していたすべての人から裏切られたのだから倒れるのも当然だろうな。

ともかくだ。騎士学校の教本を隠して、俺の成長を妨害してきたこの男、ロイドをなんとかしないとな。

「入れ、ロイド」

「はっ、失礼いたします」

ロイドが、さわやかな笑みを浮かべて俺に近づく。

「ジャック様、客間に商人が来ております。今日は『精霊の種』を選んでいただく日ですから、ご用意を。アレン様もお待ちでございます」

「精霊の種」とは、「精霊の加護」という特殊能力を与えてくれる貴重な種だ。

貴族は長男が家督を継ぐことになっている。アレンは兄とはいえ、俺の一月（ひとつき）前に生まれた庶子（しょし）だから、俺のあとに精霊の種を選ばなければならない。

弟の俺に順番を譲らなければならず不満なのは理解できる。が、悪意を持って俺をハメてくるのだから隙を見せてはいけない。

「ロイド、この家の長男は誰だ？」

「……ジャック様でございます」
「だったら、アレンなど待たせておけば良い」
「はっ、失礼します」
俺の言い方もぶしつけだったが、ロイドが不満ありありなのは彼の態度からわかった。
まあ、ともかく今は考える必要がある。
ジャックがガルハンの原作通りに身を滅ぼしていくという最悪の事態を避けるために、やるべきことがたくさんあるのだ。
季節はもうすぐ春を迎える。主人公が現れたり、いろいろ事が動き出す学園生活が始まるまであと一ヶ月。時間はない。
貴族の嫡子だから金はあるが、入学準備は自分でしなきゃダメだ。本来は、執事のロイドがやってくれるはずなのだが、逆に邪魔をしてくるのだから痛い。
ゲームの設定では、学園に執事を連れて行けることになっているが、ロイドを遠ざけないとどうにもならない。できれば彼に代わる執事が欲しいが、その執事を選ぶのは母親の役目。母親もなんとかしないとダメだよな。
おっとその前に、今精霊の種を売りに来ている商人にも対処しておかなくては。この商人がロイドの手先であることを俺は知っている。
なお学園に入れば、ダンジョンのモンスターと戦わなければならないし、ガルハンの主人公やヒロインたちと対決することにもなるだろう。
モンスターにやられて死ぬのも、ガルハンの主人公たちに負けるのも嫌だ。
戦うための力が欲しい。
原作では、そうしていなかったが、さっきも考えた通り、モノマネ師に次ぐ、セカンドジョブを手に入れておきたい。
はあ、入学までにやることが多いな。
これまでジャックには力がなかった。でも今は俺がいる。
ジャックの願いは俺の願いだ。彼の希望は、最高の騎士（ナイト）になること。
俺がその望み、叶えてやるよ。
心の中でそう誓いを立て、俺は「反撃」の準備を開始する。

第2話　反撃

スノウ子爵家はナイトの家系だ。ジャックはナイトとして父親を尊敬し、憧れていた。しかし父親は、裏で権力と暴力を振りかざし悪事を重ねていた。
母親は優しかった。でも、裏ではジャックの悪口を広め疎（うと）んじていた。双子の弟のアンリは可

愛かった。しかし陰ではジャックを馬鹿にし、見下していた。兄のアレンは優しかった。それは、ジャックのすべてを奪い取るためだった。
ゲームの中では、それらのことを知ってもジャックは復讐しようとしなかった。裏切られたことを認めたくなかったのだ。
ジャックは優しかったので家族を傷つけられなかった。救いを求めなかったのは、誰も巻き込みたくなかったため。それで、目を逸らすために学園で悪役を演じたり、ヒロインたちに絡んだりしていた。
なんて馬鹿で優しい男なんだ！　自分のことなのにかわいそうで涙が出る。
ジャックは家族に騙されたのではない。わかった上で彼らの仕掛ける罠にはまったのだ。この馬鹿野郎が！
家族を傷つけるなんて高潔なナイトに相応(ふさわ)しくない行いかもしれない。でも今は、罠を打ち砕く知恵と力が必要なんだよ！
今俺は自室を出て、シャンデリアが輝き、高級な黒檀(こくたん)のテーブルが置かれた豪華な部屋に来ていた。その部屋には、母、兄、弟、ロイドがそろっている。
子爵家御用達(ごようたし)の商人は控えの間で待っていた。精霊の種の商談が間もなく始まるのだ。
さてと、反撃を始めるか。
「まずは俺からだな。控えの間で一人で選ぶ。誰も通すな」

「ジャック。何をいきなり。わがままを言わないで」
母親が慌てて引き留めてきた。
彼女たちは連携して俺を騙し、使えない精霊の種を食べさせる気なのだ。
その証拠にアレンも抗議の声を上げた。
「ジャック。みんなで仲良く選べばいいだろう。兄弟なのだから」
「アレン。父のいない今、この家の当主は誰だ？」
「ジャックだ……」
俺は嫡子の強権を使ってアレンを黙らせる。そして一人控室に踏み込み、鍵を閉めた。
なおこの部屋には秘密が漏れないように、防音処理が施されている。控室といっても豪華で照明は明るく、柔らかなソファーと高級感ある机まで置いてあった。
「これは、ジャック様、いかがされました？」
ソファーに身を沈めていたデブの商人が俺を見て立ち上がり、膝を折って挨拶してくる。こいつの名前はゴードン。アニメで俺を騙しまくった商人だ。
「一人で選びたくてな。全部出してくれ」
「はい。ただ今、用意をいたします」
俺が対面のソファーに座ると、ゴードンは精霊の種を机の上に並べた。
数は五つ。ヒマワリの種や柿の種の形をしていた。

ゴードンは、俺が「無詠唱」で「上級鑑定」を使えるのを知らない。
「どの精霊の種がよいのだ？」
「このサンダーランスの種がおすすめでございます。サンダーランスは強力で範囲も広く、敵を麻痺させる追加効果もあります。ジャック様にはお似合いかと」
ナイトの家系であるため、ジャックの初期ＭＰは３０しかない。ゴードンがすすめてきたサンダーランスはＭＰを２０使う。ギリギリ今の俺にも使える。
この世界の設定では、一度ＭＰを枯渇させれば初期値から３６０上昇する。それを利用すると、ナイト職であってもサンダーランスはかなり有用な能力となるわけだ。
しかし今ゴードンが手にしているのは、ＭＰを１００も使うフルフレアの種。
実際に原作では、ジャックはフルフレアを精霊の加護としていたが、ＭＰ３０しかないので一度も発動させることはなかった。
ゴードンがうやうやしく告げる。
「お父上もサンダーランスでご活躍されたそうで、子爵家を継がれるジャック様にはピッタリの精霊の種でございます」
こいつはジャックが父親に憧れているのを知っているので、サンダーランスと偽っているのだろう。
見てろ。その得意げな顔、蒼白にしてやるよ。

「なるほど。では、アレンにくれてやろう。俺がその種を譲れば喜ぶだろうな。優しい兄上の喜ぶ顔をぜひ見たいものだ」
「いや、それは……」
知っていたが、やっぱりこいつはクロだな。彼は言い淀んでは額に汗を流し、目を泳がせる。
「そうだ、ゴードン。お前が兄上に直接手渡してくれ。俺が一緒に見届けてやろう」
「そんな、私ごとき商人風情が……、畏れ多いことでございます」
「なるほど。俺にフルフレアの種は食べさせても、兄上には食べさせられないのだな」
「な、何をおっしゃいます。これは確かにサンダーランスの種でございます！」
「俺は何の精霊の種かがわかるのだ。机の上の他の種は、サンダーランス、身体強化、ライトニング、そして激レアの精霊の種、透明人間だろ？」
俺が一つひとつ指差しながら精霊の種を「鑑定」していくと、ゴードンの顔が真っ青になった。商人が、上の身分である貴族を騙したのだ。首を刎ねられても文句は言えない。
俺は立ち上がると、扉を開けようとして歩き出す。
「さて、ゴードン。その首、よく洗っておけよ」
「お、お待ちください。ジャック様。これは確かに……」
「まだ言うつもりか？　俺はロイドが裏切っているのも知っている。その後ろに母と兄上がいるのもな。その上で、もう一度だけ聞いてやる。お前の持っている種はなんだ？」

「……フルフレアの種でございます。申し訳ございません」
床に頭を擦り付け、土下座して許しを請うゴードン。
「俺の命令を聞けば許してやろう。フルフレアとライトニングを二人に食わせろ。簡単だろ？」
この二つは強力な魔法だが、名門の魔法使いの家系でもなければ発動は不可能。兄上たちには自分の仕掛けた罠に自分でハマってもらおう。自業自得だ。
最後に俺は、ゴードンに向かって冷たく告げる。
「ああ、言っておくが、『はい』以外の答えは斬首だ」
「は、はい……」
こいつは額を床に擦り付けているが、実はそれほど怯えているわけでもない。この場さえしのげれば、残りの精霊の種を売り払って他国に消えるつもりなのだ。
俺は、残りの透明人間と身体強化とサンダーランスの種をアイテムボックスに入れ、担保だと告げた。ゴードンは、それでも余裕らしい。表情を崩すことなく「構いません」と答える。
ゴードンと共に控えの間を出て、客間に向かった。
部屋に入った俺は、さっそく母に報告する。もちろん真実は伝えない。
「母上、私は父上と同じサンダーランスの魔法を選びましたよ」
「そうなのですか。ジャック、おめでとう」
母親は醜悪な笑みを顔に張り付かせている。こんな演技で俺を騙せると思っているのだろうか。

ゴードンが精霊の種を机の上に二つ置くと、母が訝しそうに言う。
「さっ、アンリの番です。あら、二つだけなの？　困ったわね」
「申し訳ございません。こちらがサンダーランスの種で、こちらがレアな精霊の種の、透明人間の種でございます」
ゴードンは俺の指示通りに嘘をつく。
「アンリは父上とジャックと同じサンダーランスにしなさい」
「はい。母上。僕は兄上と一緒で嬉しいです」
アレンとアンリはゴードンの言葉を疑ってないようだ。二人とも同時に精霊の種を口に入れ、満足そうな笑みを浮かべていた。
精霊の種は、食べてから一週間後に教会の洗礼を受けると、力を解放すると言われている。
実際は、教会で詠唱の呪文を教えてもらうだけなので、元から知っているか、俺のように無詠唱スキルがあればすぐ使える。
一週間後、教会で二人の顔が引きつるのを楽しみにしておくよ。
「ご苦労でした。ゴードン、これが代金です」
ロイドが金貨の入った袋を机の上に置く。
「実はジャック様に見せたいものがございまして、他の皆様にはご退席お願いしたいのですが……」
ゴードンはすぐには受け取らず、皆に退出を促した。これは俺が命令していたことである。

「ふむ、なんだろう。私はゴードンの話を聞きます。母上、失礼」
自然に答える俺。奴らは疑うような様子は見せない。
「そう、またあとで話しましょう。アンリ行くわよ」
「ジャック、俺も失礼するよ」
含み笑いを浮かべて四人は退出していった。
この程度の策にはまってしまうとは……。まあ、アニメでも、ジャックは罠に引っかかったフリをしていただけだしな。
ゴードンが恐る恐る俺の顔色をうかがってくる。
「こ、これでよろしいでしょうか？」
俺は、ロイドが置いたお金の袋をアイテムボックスに入れると、部屋の隅のヒモを引っ張った。
突如として、バタバタと足音がこちらに向かってくる。
「ジャック様、いかがされました？」
すっ飛んできたのは、衛兵長と部下の衛兵五人。子爵家には、このような仕掛けが各部屋にある。
俺は冷たく言い放つ。
「この商人が私に無礼を働いた。貴族への侮辱罪により、こいつを牢屋に二週間ぶち込んでおけ」
急な展開にわなわなと震え出すゴードン。
「お、お許しくださったのではなかったのですか、ジャック様」

「嘘などついていない。二週間で許してやるのだ。ただ、兄と弟がお前を許すかまでは俺の知るところではないがな。なお保釈金はお前の全財産とする。連れていけ」
保釈金を払えば全財産を失う。しかし払わなければ、二週間を待つことなく怒り狂ったアレンとアンリたちに殺されるだろう。俺が直接手を下すまでもないし、ゴードンが破産して逃げても別に構わない。
「そ、そんな……、お、お許しを！」
衛兵たちに取り押さえられ、ゴードンは絶叫とともに扉の向こうに消えていった。
これで、ゴードンを片付けたわけだが、同時にロイドの対処もできた。この商談を取り仕切っていたロイドは、騒動の責任を取らされ処刑されてもおかしくない。
ロイドは切れ者だ。その程度はすぐに理解して、何らかの行動を起こすはずだ。
人を呪わば穴二つと言うが、俺を呪ったことで、ゴードン、ロイド、母、兄、弟、五つも穴ができたな。これでしばらくは大丈夫だろう。
問題は、二週間後に領地から帰ってくる俺の父親だ。
父親が帰ってくれば、その威を借りて母親が増長する。その前に、まずは母を黙らせておきたい。
騎士学校に行くまでには、実家の問題はある程度、片付けておきたいからな。
ふと自分の手を見てみる。
両手が剣ダコでゴツゴツだった。俺の記憶が戻る前、ジャックは現実から逃れるように剣を振り

続けていたのだ。
ジャック、お前の絶望を俺が希望に変えてやるよ！
俺は固く拳を握りしめた。

第3話　敵中孤立

自室に戻った俺は、さっそく精霊の種を食べることにした。
選んだのは、透明人間の種。
柿の種の形をしていて、なかなか美味かった。
透明化能力を選んだのは、この種が激レアということもあるけれど、父親から俺の母親に送られた結納の品「風雷の魔法書」を奪うためだ。その本は母親が正室であることの証明、そして権力の証でもある。これを奪えば、母親に致命的な打撃を与えることができる。
さっそく行動に移ろうと思う。狙いは夕食時だ。
貴族の夕食は食堂に集まり、地位の低い者が高い者を出迎えるという決まりがある。
最上階の五階に住んでいるのは、父親と正室の母親。夕食時には、お付きの侍女と執事も食堂に集合するので、母親の部屋には、留守を守る侍女二人だけしかいない。

仮に、風雷の魔法書がなくなったことがすぐにバレても、侍女が人を呼ぶまでには時間がかかるだろう。やるなら今しかないな。
ちなみに透明人間には、消費ＭＰ５で約一分間なれる。ＭＰ３０の今の俺なら六分間。五分もあれば、母親の部屋から風雷の魔法書を奪って自室に戻るくらい余裕のはずだ。
俺は鏡の前に立って、透明人間の能力を発動してみた。
俺の体が鏡から消えていく。鏡の正面に立っているのに自分の姿が見えないなんて変な感じだな。動いても透明人間のままだし、飛び跳ねても物音一つ聞こえない。
マジ便利だ。透明になるだけでなく、無臭、無音、気配すらなくなる。
その上、透明化中は魔法を無効化させることもできる。怖いのは物理攻撃だけ。
鏡の前で透明人間を解除すると、急に俺が現れた。ともかくこれで能力の確認は終わりだ。
俺はそっと自分の部屋を出る。人目につかないように警戒しながら、五階に続く階段に向かった。
四人の衛兵が守っている。
さっそく俺は、透明人間になって衛兵の前に出た。
全く反応がないな。衛兵の顔の前で手をひらひらさせてみたが、彼らは暇そうに欠伸をしただけ。遊んでばかりもいられない。俺は堂々と衛兵を突破して、階段を上り五階に足を踏み入れる。
五階の廊下には、高価な壺や絵がいくつも飾られていた。母親の部屋の前に移動して、ドアの前に立つ。さすがにドアには鍵がかかっているな。まあそれも想定内だ。

俺はドアをノックして、近くの壺の前に待機した。若い侍女がドアを開け、誰もいない廊下を不思議そうに見ている。そっと壺を倒すと、侍女は慌てて壺に駆け寄った。その隙に母親の部屋に侵入する。

部屋の中にはもう一人侍女がいて、机に座って紅茶を飲んでいた。

侍女の後ろの本棚に風雷の魔導書がある。この部屋には何度も来ているから、保管場所は覚えているんだ。すぐに本棚に駆け寄って風雷の魔法書を取り出すと、アイテムボックスに放り込む。これであとは帰るだけだな。

俺は侍女に近づき、わざとカップを倒した。服に紅茶がかかって慌てる侍女を横目に、悠々とドアを開けて外に出る。

廊下に出ていた侍女ともすれ違ったが、気付いた様子はない。本当に楽勝だった。兄のアレンが透明人間の種を欲しがったのも納得だな。

とはいえ、部屋に戻るまで油断は禁物だ。早足で歩きながら階段を下りて衛兵の横を通り過ぎる。そのまま自室に帰ると、透明人間を解除した。手に汗をかいていたことに気付く。自分でもわからない内に緊張していたんだな。

気持ちを落ち着かせるため、俺は紅茶を入れた。ソファーに座って外の景色を眺めながらゆっくりと紅茶を飲む。飲み終わった頃にドアがノックされて、侍女が部屋に入ってきた。

「ジャック様、お食事の用意ができました。奥様が食堂でお待ちでございます」

「わかった。すぐ行く。ところでロイドはどうした？　姿が見えないのだが、先に食堂に行っているのか？」
ロイドの動向が気になっていたので、念のため尋ねておく。侍女は首を傾げながら返答した。
「いえ……、ロイドさんは食堂にいませんでした」
「そうか。まあいい、案内してくれ」
「はい、かしこまりました」
食堂に行くと、母、弟、兄がいた。侍女が言った通りロイドはいない。ちなみに母は、風雷の魔法書が奪われたことにはまだ気が付いていないらしい。作戦成功だな。
食堂の長テーブルには、贅沢の限りを尽くした料理が並べられていた。俺は母と弟の間に座る。正直、母たちと食べても美味しくないんだよな。母が俺に嘘の笑顔を向けてくるのが腹が立つ。なぜ裏で俺の妨害をしているのか、問い詰めたいぜ。
そんなことを思いながら、こっそりため息をつく俺。食事が始まって間もなくすると、母の部屋にいた侍女が飛び込んできた。顔を真っ青にしている。ようやく風雷の魔法書がなくなったことに気付いたらしい。
侍女が母の耳元に小声でささやくと、母は手に持っていたナイフとフォークを落とし、慌てて食堂から飛び出して行った。そして戻ってくると、母はすぐさま侍女に命令した。侍女がそっと食堂を出て行く。

母の考えていることは大体わかる。彼女はすでに俺を疑っており、俺をここに引き留めて、俺の部屋を探す気なのだ。実際に、食堂から出ないように監視されていた。
しばらくして部屋に戻ってみると、探し回った形跡があった。見つからないのは当たり前だ。アイテムボックスに入れてあるのだから。
とはいえ、これで俺の無実を証明してくれたようなものだ。もう安心だな。

そう思っていた時期が俺にもありました。
とはいえ俺も警戒しており、念のためベッドの布団をクッションで膨らませて、別の場所で寝るようにしていた。
部屋のドアが静かに開く。俺は気配を察知して目を覚ました。
まさかドアから堂々と侵入してくるとは思わなかったぜ。暗闇の中で息を潜めて気配を探る。敵は六人いるようだ。
六人は無言のまま俺のベッドに近づき、刃物を引き抜いた。
全員、短剣を持ち、黒い戦闘服を着て覆面をしているな。僅かな月の光に照らされて短剣が凶悪に煌めく。母の差し金だろうが、実の息子に暗殺者をプレゼントしてくるなんてどうかしてるぜ。
俺の手元には、訓練用に刃をつぶした鉄剣と、ナイフが五本ある。
気配を悟られるなんて暗殺者としては失格だぜ。叩きのめしてやるかな。

暗殺者たちはベッドを包囲すると、一斉に短剣を布団に突き刺した。しかしすぐに布団を撥ね上げ、声を上げる。
「いないぞ。探せ」
「はっ！」
俺は、透明人間の能力を発動させる。
透明人間になれば姿も見えないし、剣を引き抜く音も聞こえない。
さて、間抜けな暗殺者に、透明人間の怖さを教えてやろう。
俺は訓練用の鉄剣を引き抜いて、近くの暗殺者の脇腹に叩き付けた。
「ぐはあああああっっ」
暗殺者の脇腹に鉄剣がめり込み、骨が折れる感触が伝わる。
まずは一人目。
急に悲鳴を上げて崩れ落ちたそいつに、暗殺者の一人が駆け寄る。
それを無視して、別の暗殺者の鳩尾に突きを叩き込む。悶絶して膝を突くと、さらに顔を蹴り飛ばしてやった。これで二人目。
続けて、次の獲物を狙う俺。一気に叩いて混乱させてやるぜ。
恐怖に駆られた暗殺者が喚いた。
「な、なにかいるぞ。ぎゃあああああっっ」

絶叫する彼をすり抜けざまに蹴り上げ、さらに剣を振り下ろす。鈍い音がして骨が砕ける感触が俺の手に伝わる。悲鳴を上げ、そいつは沈黙した。
目の前で仲間が倒されたのを見て、パニックに陥った奴が無茶苦茶に短剣を振り回す。そいつの足を払って転がした。そのまま鳩尾に剣を叩き込んで気絶させる。
「うわあああああっ」
振り向くと、二人の暗殺者が逃げようとしていた。
懐からナイフを取り出して足に向かって投げつける。二本のナイフが別々の暗殺者の足を撃ち抜く。足をやられてもがく二人の暗殺者を、俺は冷ややかに見下ろしながら気絶させた。
これで殲滅完了だ。透明人間は最強だぜ。
さてと、間抜けな暗殺者の顔を拝むとしよう。
暗殺者を縛り覆面をはぎ取ると、全然知らない顔だった。起こして話を聞こうとしたら、舌を噛んで自殺しようとしたので、慌てて再び気絶させる。
死ぬ覚悟ができているとなるとプロの暗殺者だろうか。この手の奴は普通の方法だと絶対に口を割らないからな。なら、こちらもプロに任せよう。
俺は廊下に出て衛兵長を呼んだ。
呼んでみたものの、彼も母親に加担している可能性がある。念のため、彼の反応も確かめておこう。

「ジャック様、どうされました？」
「あいつらが誰か俺に教えてくれないか？」
そう言って俺は衛兵長を部屋に招き入れた。
血を流して縛られている暗殺者を見て衛兵長が驚いている。この反応を見る限り、衛兵長は無関係のようだな。安心したぜ。
「部屋のドアから暗殺者が入ってきたんだが……」
「ドアから？　ジャック様は私を疑っているんですか？　違います。本当です」
「ああ、そうだろうな。一応、確認しただけだ。信頼できる口の堅い衛兵を集めて、こいつらを連れていけ」
「はっ！　ご命令に従います」
衛兵長が衛兵を呼び集め、暗殺者たちを肩に担いで部屋の外に出て行った。秘密にしろと言わなくても衛兵長は理解したようだ。有能で信頼できる衛兵長でよかったよ。
俺は部屋を片付けて、警戒しながら眠りについたのだった。

◆　◇　◆

次の日、コンコンと部屋の扉がノックされ、俺は目を覚ました。

部屋に来たのは衛兵長である。
「ジャック様、よろしいでしょうか」
「入れ、暗殺者が口を割ったか？」
衛兵長は敬礼すると、続けて申し訳なさそうに告げた。
「申し訳ありません。牢内で何者かに殺されたようです。私の責任です」
「こ、殺されただと!?　……そ、そうか、責めるつもりはない。ただし警戒は厳重にしておけ」
おそらく母たちの犯行なのだろうが、容赦ないな。ついでにロイドの動向を尋ねておく。
「ロイドは見つかったか？」
「いえ。ただ、夕方に屋敷から出て行く姿を見た者がおりました。まだ戻っていないとのことです。なお商人のゴードンは保釈金を払うことに同意しました。現在、資産を押収中です」
「わかった」
そのとき、侍女たちの騒ぐ声が聞こえてきた。
「ん、なんだ？」
「奥様の侍女のようですが……」
風雷の魔法書を探して、あちこちひっくり返し回っているのかもしれない。
動き出すなら今しかあるまい。この隙に入学準備を進めておこうと考え、俺は衛兵長に言った。
「ジョブランク1の生活魔法を使える者を用意してくれ。確か奴隷の子の中にいたはず。それと、

軽食とケーキもな」
衛兵長は「はっ！」と敬礼して退出していった。
風雷の魔法書が消えたタイミングでロイドが逃亡。普通に考えれば犯人はロイドとなる。魔法書を失った母親は、ロイドを血眼（ちまなこ）になって探すだろう。
これでいい。ロイドが逃げれば逃げるほど、母は俺に構っている場合でなくなる。
俺にはやるべきことがたくさんあるんだ。
ロイドが勉強の妨害をしていたのもあり、俺には座学の知識がない。これでは学校で落ちこぼれるのは当たり前だ。教師でもいればいいんだが……。母親には頼めないから無理か。独学で勉強するしかないだろう。
それに騎士が欲しい。騎士とは、ガルハンの設定上、付けることができる護衛のことである。ゴードンから巻き上げた金と身体強化の種で、なんとか信頼できる奴と契約したい。
そして、今できることは、自分のレベルアップだ。
モノマネ師のジョブランクを１０にするのだ。ランク１０になれば、セカンドジョブが取れる。ジャックはナイトの家系だから、ナイト系のジョブが取れる可能性が高い。ナイト職なら防御力が高いので透明人間の弱点である物理攻撃も問題なくなるしな。
コンコンとノックして入ってきたのは、十代くらいの奴隷の女の子。猫耳の可愛い子だ。
鑑定で見てみると、猫族で名前はミケ、十六歳。俺のリクエスト通り、指先に火をつける生活魔法の「ライター」を持っていた。
ミケは、俺が頼んでおいた軽食、パンとスープに紅茶、そしてケーキを机の上に置いた。俺は彼女に告げる。
「怯える必要はない。その椅子に座ってケーキでも食べててくれ」
「いえ、そんな……」
「命令だ。あとは紅茶を飲んでそこにいるだけでいい。俺のことは気にするな」
「……はい、いただきます」
恐縮するミケをソファーに座らせる。
ミケはケーキと紅茶を恐る恐る食べて頬を緩めた。ミケには協力してもらいたいから、ご褒美をあげておかないとね。
協力してもらいたいこととは、モノマネ師のランク上げである。
モノマネ師のランクは、他人の魔法をマネることで上がる。なお、モノマネスキルで魔法を使っても、ＭＰではなくＳＰ（スキルポイント）を消費する。
ライターの消費ＭＰは１。たぶんＳＰ１で使えると思う。俺のＳＰは５５０だから五百五十回は使えるはず。
さっそく俺は、モノマネの相手をミケに設定し、ライターの魔法を連発した。
子供が百円ライターをカチカチやっている感じだよな。ミケからしたら、俺はただの危ない奴に

見えると思うが仕方ない。
無詠唱でひたすらライターを実行し続ける。ＳＰが少なくなると、強烈にお腹が減る。五百回目を超えたところで空腹感を覚えた。
冷めたスープとパンをつまんで休憩してから上級鑑定で自分を見ると、モノマネ師のジョブランクが４になっていた。
モノマネ師は意外にジョブランク上げが簡単なのかな。モノマネする必要があるので一人で経験値を稼げないから、上がり易い設定になっているのかもしれない。そもそも魔法のモノマネ限定でしか経験値をもらえないって厳しい制約もあるし。
そろそろ疲れてきたので、ミケに執事を呼んでくるように頼んだ。
ミケに呼ばれて現れたのは、ジルという執事だった。ジルがロイドについて報告してくる。
「失礼します。ロイドですが王都の城門を出て行ったそうで、今、捜索しているところです。その間、私がロイド殿の代わりを務めることになりました」
ロイド二号の登場だな。こいつを追い払っても、執事と侍女の任命権は母上にあるのだから意味がない。まあ、ロイドのように、あからさまに俺と敵対するわけでもなさそうだから、良しとしよう。
「ジルだったな。騎士学校の教本を持って来てくれ。それと、ミケを部屋付きのメイドにするから手配しろ」

「かしこまりました。すぐに持ってきます。失礼いたします」
とはいえ、ジルは俺の味方ではない。俺の動きを母親に報告するだろうな。邪魔されないだけマシか。屋敷に信頼できる者はいないと思って行動するしかない。
ジルが持ってきた騎士学校の教本は、王国史、大陸史、地理学、算術、スキル・ジョブのまとめ、マナー教本、剣術指南書など十冊を数える。
机に山と積まれた教本を見て、俺はため息をついた。
どうやら、新たな敵の登場だな。
だが、高校受験、大学受験を乗り越えた現代人の力を見せてやるよ！
机に向かい、まずは地理学の本を開く。見慣れない地名に戸惑いながらも、俺は夜遅くまで勉強するのだった。

第４話　不運＋不幸＋不遇＋黒猫＝？？？

次の日から、ひたすらライターの魔法を発動させては経験値を稼ぐ一方で、机に座って勉強する毎日を過ごした。
ジルには隣の部屋に控えておけと命じ、邪魔できないようにしておいた。なんだかんだで信用で

きないからな。
モノマネスキルの設定はライターのままにしてある。一度設定しておくと、解除するまで同じ能力を使うことができるのだ。
ライターと念じると指先に火が現れる。火が消えたらまたライターの魔法を発動させる。
モノマネ師のランク上げはその繰り返しだ。なんか単純作業に飽きてきたな。そう思って学園の教本を読みながらライターの魔法を使おうとしたら両方できなかった。二兎を追う者は一兎も得ず。反省してランク上げに集中する。
ＳＰが０になりお腹が減ると、ミケに食事を持ってこさせた。食べながら地理学を勉強する。三時間ほどしてＳＰが全回復すると勉強を終了。再びライターの魔法を発動させてランク上げに集中した。
ランク上げ、食事、三時間の勉強。これを三回繰り返して一日が終わる。ストイックに取り組んだおかげで、この日のうちにランク６になった。さらに次の日はランク７に。順調にランクが上がっていくのは嬉しいな。単純作業の繰り返しが報われた感じがするぜ。
ランク８になったとき、上級鑑定スキルで下級精霊が見えるようになった。この世界には精霊の種があるのだから、精霊がいるのは当然なのかな。ランク１０になったら、上級精霊が見えたりするのかもしれない。
教会に行く前日、ジョブランクが１０になった。これで念願のセカンドジョブを取ることがで

きる。
それからは勉強オンリーに切り替え、必死に地名を叩き込む。そんな矢先、下級精霊さんが現れ、ふわふわと俺を窓へと誘導してきた。なんだろう。
アンリとアレンが馬車に乗り込んでいる。どこかに行くらしいのだが、ジルに聞いても、首を横に振るだけ。衛兵長に問い詰めてようやくわかった。
二人は闘技場（アリーナ）に行くらしい。
「えっ、闘技場？」
「はい。この時期は、騎士学校に通う貴族様に仕官希望の騎士階級の方が、闘技場で試合を行うのです。お付きの騎士しか貴族学校の寮に入れませんから、入学前に騎士を選定するんですよ」
チッ、油断していたな。騎士は入学後にのんびり探そうと思っていたが、それでは遅かったようだ。
俺は怒った目でジルを睨みつけながら問い詰める。
「ジャック様の騎士は、奥様自ら選ぶと言っておりましたので……」
はあ？　アニメとゲームでは、ジャックに騎士なんていなかったぞ。闘技場に行かせないための嫌がらせなんだろうが、自分の息子に冷たすぎないか？
「母上に厚意だけ受け取ると伝えてくれ。俺は自分で騎士を選ぶ。ジル、支度しろ」
「かしこまりました。馬車を用意いたします」

ジルは命令すればきちんと実行する。俺の味方ではないが、完全に敵というわけでもないようだ。それにしてもジャックってなんでこんなに不遇なんだろう。
急いで着替えを済ませて馬車に乗り込む。ジルには留守を命じ、代わりに衛兵長と行く。
ちなみにジャックは箱入り息子で、子爵家の屋敷からほとんど出たことはなかった。貴族の息子は国家の人質という扱いだから、王都の外に出るのは許可がいるくらいなのだ。
子爵家の屋敷は、王都内の三重の城壁の一番内側、第一区画と呼ばれる場所にある。闘技場のある第三区画は一番外側の城壁の区画で、子爵家の屋敷から結構距離があった。
王都だけあって道が広く人が多いな。貴族の馬車を見ると民衆が避けていくから、進むのは早いけど。
城壁は高く厚みがある。馬車の窓から見ても圧倒的な存在感があった。一つ目の城壁を越えて、第二区画に入ると、騎士や豪商たちのレンガ造りの家が並んでいた。
さらに二つ目の城壁を抜けると第三区画に入り、木造の家とレンガの家が混在するようになる。ここは、平民の区画で、冒険者の姿も見える。
闘技場は庶民の娯楽で、王都には三つある。そのうち東の闘技場が、この時期の騎士の試合で賑わうのだと衛兵長が教えてくれた。
どんな場所なのかと思ったら、古代ローマのコロッセオみたいな建造物だった。なお、人と人の殺し合いは法律で禁止されている。そこで行われるのは、馬上の騎士が木製のランスで戦う槍試合と、木剣で戦う剣闘の二種目。今日は剣闘だけ開催されているようだ。
試合会場には、土のグラウンドに白い粉で円が四つ書いてあり、その中で戦いが行われていた。
観客の中にアレンとアンリを見つけた。
アレンは俺を見て顔をしかめ、アンリは「なんでお前がここにいる」という顔をしていた。
二人を無視して試合を眺めていたら、円の中で一人の男が声を張り上げる光景が目に入った。衛兵長に尋ねてみる。
「あれは何をしているんだ？」
「戦う前に血統を読み上げているんですよ。父親は誰とか、どこに仕えていたとか。有名な先祖の名を挙げたりして、試合前にアピールする人もいます」
「なるほどな」
「仕官するためには、実力以上に信用がいるんですよ。私も大変でした」
騎士と名乗るためには、国の騎士団に入るか、貴族と契約するかしか道はないらしい。ジョブとしてナイト職を持っていても関係ないようだ。
試合会場を見ていた俺の目に、ガルハンで見覚えのある人物が映る。
「ん？　あれは……、ラルフ・ガードナー!?」
さっそく俺は鑑定してみる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【名前】　**ラルフ・ガードナー**
【ジョブ】　**イージスナイト（ランク7）**
【スキル】　**剣術、盾術、生存、守備力上昇、詠唱省略、自動迎撃、ノックバック、騎乗**
【精霊の加護】　**なし**

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ラルフ・ガードナーとは、主人公の騎士となるキャラだ。
彼は、隣国のヴィクトリア帝国を追放され、王国で士官できずに自棄になって酒を飲んで倒れていたところを主人公に助けられて、騎士の契約を結ぶという設定になっていた。
とにかく不幸、不運、不遇で、主人公にこき使われるキャラ。
「イージスナイト」のジョブランク7でとにかく硬く、超絶攻撃力のアイテム「不発ボム」を三連続でくらっても生き残る。まあ、不発ボムが三連続で爆発すること自体、不運とかしか言えないんだけどな。
ラルフは、ボロボロの甲冑を着ていたものの、試合にはあっさりと勝利していた。
が、ラルフを騎士にしようと声をかける者はいなかった。

なんで？　ラルフの強さは本物だぞ？　周りにいる他の騎士をざっと鑑定してみたが、ジョブランク5が普通だった。ラルフを無視する理由がわからないな。
ラルフが主人公の騎士になるというガルハンの設定を無視して俺の騎士にしたら、これからの展開に影響があるんだろうか？　いや、彼が主人公パーティからいなくなるだけで、主人公は弱体化するはず。主人公が活躍して俺が処刑されるという原作の展開を避けるためにも、よし、声をかけてみるか！
ちなみにラルフの容姿は、赤髪で青い瞳のチャラ男風。口癖は「なんで俺ばっかり⁉」で、アニメでは毎回このセリフがあったような気がする。背の高さは普通でノリは軽い。俺は、そんなラルフのキャラが好きだった。
俺はラルフの肩に手をかけて呼び止める。
「ああ？　なんか用か？」
「闘技場で声をかけたら、普通は仕官しないかって話だと思うが？」
「えっ、俺を雇ってくれるの⁉」
なぜそこで驚く。アニメ通りの話しやすい奴だな。
「俺はジャックだ。条件はあるか？」
「んー、即金で金貨十枚でどうよ！　それなら永遠の忠誠を誓うよ！」
安いな。ああ、帝国から来たばかりで金欠なんだっけ。

でも、普通の騎士の契約金は金貨三十枚はするはず。自分を安く見積もり過ぎだろ！
まあいい、永遠の忠誠を誓ってもらおう。
「即金で金貨十枚だな。ほら」
「マジか！　おし！　契約成立だな！　契約の精霊に我、主をここに定め、忠節を尽くす。忠誠契約！」
ラルフが詠唱して、俺と主従の契約を結ぶ。これで、主人公の騎士が誰になるかわからなくなった。にしても、いい盾役を見つけたな。
でも、ラルフは俺に雇われて不運なんじゃないかな。まあ、喜んでるからいいけどさ。俺はアイテムボックスから身体強化の種を取り出してラルフに渡す。
「ラルフ。身体強化の種だ。ここで食え」
「いいのかよ？　まあ、食べるけどさ。んー美味いな。おー強くなった感じがする。ジャック、これからよろしくな！」
「ああ、よろしくな！」
「なあなあ、聞き忘れたけど、猫を飼っていいよな？」
言っていなかったが、ラルフを語る上で一番重要なのが、大の猫好きなこと。
帝国を追われた理由もそのことに関係していて、猫嫌いで有名な皇女の屋敷を猫屋敷にしたから。なんでそんなことをしたかというと、拾った猫を捨てられなかったためとか。おまけに集めた猫が

皇女のパンツを盗ったのが決め手になったのだった。
「いいぞ。今なら猫耳のメイドも付けてやるよ」
「マジかよ！　一生ついて行くぜ！」
俺はお前の一生が心配になってきたぞ。このノリの軽さをいいように利用されて、ラルフは主人公にこき使われてたんだよな。
ラルフが、軽快なノリのまま俺に尋ねてくる。
「猫屋に行っていいかな。運命の猫に会ったんだよ」
「いいけど……、猫屋なんてあるのかよ」
「あるに決まってるだろ。知らないのか？　猫はネズミを捕ってくれるだろ？　大人気なんだぜ！それに血統書付きの猫は高いんだよ！」
「その運命の猫はいくらするの？」
「金貨十枚だな！　早く行かないと買われちまうだろ！」
ラルフはボロボロの鎧を脱いで服に着替えると、俺を急かして馬車に向かった。
俺、ラルフ、衛兵長の三人が馬車に乗り込んで猫屋に行く。
たぶんラルフが買おうとしているのは、彼の愛猫でガルハンのマスコットキャラ「ルーン」って黒猫だと思う。
ラルフが御者を急かして馬車を飛び降り、金貨を握りしめて猫屋に駆け込んだ。

立ち読みサンプル
はここまで

まさか即金の理由が猫とは思わなかったよ。
馬車に戻ってきたラルフが子猫の黒猫を抱きしめている。こいつ、大丈夫かと思ったのは内緒だ。
そういえば、ラルフと契約する際にネコ耳のメイド（ミケ）をラルフに付けると約束したんだっけ。
ミケ、頑張ってくれ！
俺は、不運な騎士と馬車に揺られながら、子爵家に戻った。
馬車を降りるときにラルフが黒猫に告げた。
「よし！　お前の名前は、ルーン・ガードナーだ！」
ガルハンのマスコットキャラが命名された瞬間である。

第5話　○○ナイツ？

王都の中心部に建てられた教会は、身分を問わず洗礼を行っている。
ジョブを確認するため、詠唱を知るため、セカンドジョブを得るため、様々な理由で人々は教会を訪れる。
窓にステンドグラスが張られ、教会の内部には、荘厳（そうごん）な雰囲気が漂っていた。でも、十字架の下には賽銭箱（さいせんばこ）が置かれている。微妙に和洋折衷（わようせっちゅう）しないでほしい。